

刺し網漁による海鳥混獲の現状把握

～ウミガラスとエトピリカの保全を目指して～

鈴木康子（バードライフ・インターナショナル東京） 佐藤信彦（北海道大学（当時））

刺し網漁による海鳥混獲

- ・ 潜水性の海鳥が偶発的に網にかかりやすい
- ・ 世界で毎年推定40万羽が刺し網漁で混獲されているが、効果的で実用的な対策が確立されていない
- ・ 日本では刺し網漁による混獲の報告義務がなく、混獲される海鳥種や発生件数といった情報が不足

→海鳥混獲削減に向けて、現状把握の必要性

- ・ 調査：いつ、どこで、どの種類の混獲が発生？
- ・ 場所：北海道北西部（海鳥の生息数が多く、漁業が盛んな地域）
- ・ 調査協働者：刺し網漁業者4名

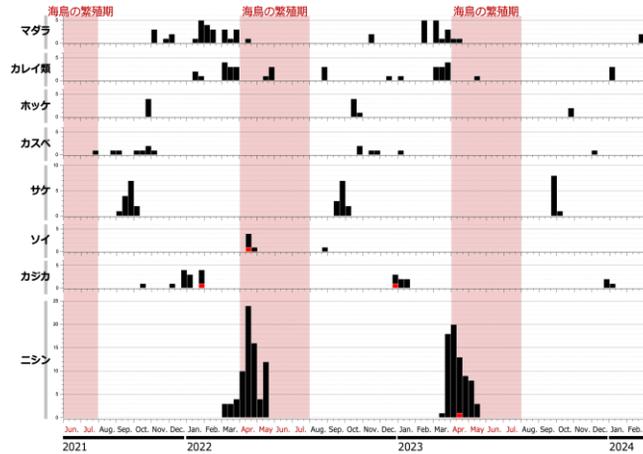
2021-2023年度の調査結果

- ・ 合計320操業分のデータを蓄積
- ・ 主に8種の魚種が漁獲対象
- ・ 対象魚種によって網の仕様や漁場が異なる
- ・ 報告された海鳥混獲はヒメウ3羽とウトウ1羽
→予想に反して少数
- ・ 混獲発生はいずれも沿岸部、水深は35m未満



ヒメウ（環境省レッドリスト絶滅危惧IB類） ©北海道海鳥センター

混獲発生 の 季節性



魚種別操業回数（各月の上中下旬で集計）。混獲が発生した操業は赤で、海鳥繁殖期はピンクで示されている。

- ・ 混獲は海鳥繁殖期前半と冬季に報告された
- ・ 海鳥繁殖後期は刺し網漁の操業がなかった
- ・ 冬季の操業回数は他の年よりも少なめ
- ・ 操業回数は魚種単価（単価が低い場合はより高価な魚種を狙って他の漁法にシフト）や天候などの要因に左右される

教育普及（リーフレット）

- ・ 負担が漁業者のみにしわ寄せされないよう、一般市民による混獲問題の認知度向上に向けて作成
- ・ 刺し網漁による混獲のメカニズムや、本活動と葛西臨海水族園との協働事業などを紹介
- ・ 漁業者の役に立つように、混獲されやすい海鳥種のイラストも掲載
- ・ 水族園・動物園など11か所で配布

リーフレットのダウンロードはこちらから →



活動成果と今後の展望

- ・ 体系的データ収集プロトコルの確立
- ・ データの蓄積・今後注視すべき混獲発生要因（水深・季節性）の特定
- ・ 一般・漁業者向け普及用教材作成
- ・ 垣根を超えた連携（漁業者、研究者、NGO）
→ 他地域や海外に応用可能なモデルケース

今後の展望

- ・ 環境・人的要因の変化により、混獲発生回数変動する可能性あり
- ・ 体系的データ収集の継続が重要
- ・ 持続可能なデータ収集体制づくりを地域関係者らと検討中



北海道北西部に生息するウミガラス（絶滅危惧IA類）

混獲とは

私たちの食卓に上るのは、その多くが漁業で獲れたものですが、漁業をする中で狙った魚以外の生き物が誤って網にひっかかってしまうことがあり、これを「混獲」といいます。

海鳥が混獲されるケースの一つです。漁業者は魚によって網の仕様や漁場が異なるため、海鳥が混獲されることがあります。混獲された海鳥は、漁業者の責任で放流されますが、多くの場合、混獲された海鳥は死んでしまったり、怪我を負ったりしてしまいます。

海鳥は繁殖期には卵を産みつけている時期が多く、混獲によって繁殖成功率が低下したり、産卵できず、結果として繁殖できなくなってしまうことがあります。

刺し網漁による混獲

刺し網漁によって、世界中で毎年40万羽の海鳥が混獲されています。混獲による海鳥の死傷は、毎年約100万羽に達していると考えられています。混獲による海鳥の死傷は、毎年約100万羽に達していると考えられています。

刺し網漁による海鳥混獲の削減を目指した国内の取り組み

混獲が広がる条件を解明するため、専門家と漁業者が協力して取り組んでいます。

- 1 漁獲が多くなる北海道の漁師さんに協力して、混獲に関するデータ収集を行っています。漁師さんが刺し網漁に出るたびに、海鳥混獲の有無と、混獲した魚種（魚の種類、大きさ、混獲場所など）を記録してもらっています。
- 2 漁師さんが収集したデータを解析して、混獲が起こりやすい場所・時期やその他の条件を調べています。
- 3 最新の知見を漁師さんらと共有して、混獲の対策を検討しながら混獲を減らしていくことと一緒に頑張っています。